

ある国語学者の語源探究

——大野晋博士の語源説——

村 山 七 郎

略号：IKJ (岩波古語辞典)，OJ (古代日本語)

最初に述べておきたいことがある。

言語学者なら日本語を外国語と比較してよいが、国語学者はいけないというようなことはあり得ないが、ただ言語学者が比較を行なうばあい、明らかにまちがった説を出せば鋭い批判にさらされるのに対して、国語学者のばあいは「国語学者なのだから」と言って大目に見られるという事情が、国語学者の安易な日本語・外国語比較を助長していないだろうか、つまり国語学者に「甘え」がないだろうか、ということである。

私たちは大野晋氏が日本語単語を外国語と比較することそれ自体をおかしいなどと思わない。検討・批判に耐えうる比較であれば、それを学問的成果として評価するにやぶさかではない。ただこれまで大野氏の日本語・外国語比較について私たちは「これでよいのか」という疑問をいだいてきたが、最近の氏の言説を見て一層この疑いが深まった。国語学会春季大会のシンポジウム(5月24日)は氏らの新説を中心とするものであった。そこでは大野晋・江実・藤原明三氏が意見を発表し、参加者からの質問や発言は禁じられ、私が質問しようとしたときも発言を拒まれ、「新説」について私の意見を述べることはできなかった。そこで、ここに大野説(一部は江・大野説)の検討の結果の一端を発表させていただきたいと思う。この検討には古代インド語、ドラヴィダ語の新進の学者徳永宗雄博士の懇切な援助をおおいだ。

大野博士の語源探究が表面的類似の指摘にとどまり、真の意味の語源研究でないことは、氏を主編集者とする『岩波古語辞典』(以下 **IKJ** と略す)の語源説明にあらわれている。一例をあげてみたい。IKJ 706に、古代日本語の重要な単語すめらについて次の記載がある。

…天皇。「—我が珍^{うづ}の御手持ち、搔き撫でそねぎ給ふ」<万973> ▷梵語で、至高・妙高の意の蘇迷盧 *sumeru* と音韻・意味が一致する。また最高の山を意味する蒙古語 *sumel* と同源であろう。スメをスベ(統)と同一と見る説もあるが、スメは *sume* の音、スベは *subè* で母音が相違する。

国語学者がふつうスメラをスメ・ラ(スメ・イロド、スメ・カミ、スメ・ミマ参照)と分析するのに対して **IKJ** はそう分析しないのは梵語(古代インド語、サンスリット語)のスメル(須弥山)や「蒙古語 *sumel*」と同源と見ようとする意図があるからであろう。大野博士は梵語 *sumeru* が *meru* に、「すぐれた。美しい。非常に」の意をそえる接頭的 *su-* がついたものであることに気付かなかったのであろうか。 *su-* の例: *kavi* 「詩人」に対して *su|kavi* 「すぐれた詩人」、*prasanna* 「清い」に対して *su|prasanna* 「非常に清い」。

(2) ある国語学者の語源探究

スメルは伝説的な Meru 山に su- がついて Su|meru となったもので Meru 山の別名であり、また「最高の、最善の」を意味する。

ここで梵語の e はエーと発音され、ai にさかのぼることも見落したようである。スメルのメの母音は ai にさかのぼる可能性がある。かりに古代日本語にスメルの対応形があるとすれば、そのメは乙類のはずで、スメ|ラ(皇)のメ(甲類)と一致しない。スメルのメルとスメラ(皇)のスメでは共通の音はない。意味の一致というのもあやしい。

大野博士の語源研究における非歴史主義はスメラ(皇)を「最高の山を意味する蒙古語 sumel と同源だろう」と述べるところに明示された。第一にこのような蒙古語は実在しない。ユウレイ語である。モンゴル語には母音調和があって、u と e とは同一結合単位内に共存できない。u の後に e が立つことはあり得ない。正しい蒙古語は、sumel でなくて sümer である。しかもそれは梵語からの借用語であることはどんなモンゴル語辞典にもしるされている。最も広く用いられているコワレフスキーの『モンゴル・ロシア・フランス語辞典』第2巻(カザン、1846年、p. 1431)には Meru, Sumèru, montagne fabuleuse, séjour des dieux(神々が住むという伝説上のメル山、スメル山)という説明がある。sümer がモンゴル語に出現するのは仏教が蒙古に入ってから後のことであり、チンギス汗(1167—1227)のころのモンゴル語にこのことばは実証されない。このようなことばをスメラ(皇)と「同源であろう」とするとは、

音構成と意味とが日本語に多かれ少なかれ似ている或る外国語単語を同源と判断する前にその言語の歴史を背景とするその語の成りたちをしらべることを忘れてよいのだろうか。

史的考察の無視は大野晋・江実阿博士の合作である次のアルタイ諸語・日本語比較にも見られる。以下の例は江博士が「国語学の大野晋博士によって、日本語と関係があるか否か^{注1}を判定していただき」、大野博士による「日本語との一致」の判定があったものである。

上代日本語		モンゴル語 <small>(元朝秘史の個所を示す) がここには省略する</small>
1. 女	me	eme
2. 臥	köyu	kebte-
3. 名	na	nerè
4. 目	me	nidün
5. 黒	kurosi	qara
6. 其(彼)	kare	tere

上代日本語	満州語
7. 唾 tufa	cifele- (唾をはく)

上代日本語	チュルク語
8. 黒 kurosi	qara
9. 腕 kafina (ude)	udluq

(番号は引用者のつけのもの)

これらの「一致の判定」を大野博士はどのようにして下し得たのか。この判定を下すた

めにはアルタイ諸語の史的・比較的研究、比較研究が不可欠のはずである。これまでモンゴル語、満州語、チュルク（トルコ）語について論文を発表したことがない大野博士がどのようにして判定したか、私には判らない。しかし判定の正否を検討してみよう。

1. 女 OJ me: モンゴル eme

女(メ)は甲類。モンゴル語の e が他のアルタイ諸語のどのような母音に対応し、どのような起源なのか、この点を先ずしらべてみなければならない。

ラムステット (1873—1950) によれば、モンゴル語の e はトルコ語の ä, e, ツングース語の ə, 朝鮮語の ə に対応し、アルタイ祖語 *ä に由来する。^{注2}この説は正しいと思う。

モンゴル語 e, トルコ語 ä, e, ツングース語, 朝鮮語 ə に対応する OJ の母音は甲類元列音母音 (ei) でなくて、乙類オ列音母音 (O₂) であることが推定される。モンゴル語 eme (女) に対応することばが OJ にあるとすれば、それは甲類メ (女) であるはずはない。

ツィンツィウス (1903—) はこのモンゴル語を満州語の eme 「母」, eme|ke 「夫の母」, em|xə 「妻の母」, 朝鮮語の əmi 「おふくろ」, əmeni 「母」, トルコ語 em- 「乳を吸う」, emig 「乳房」, emiglig 「乳房で育てるところの (女)」と比較し、「女」^{注3} 「母」を表わすことばがもと「乳房で育てるところの (女)」を意味したであろうと述べる。モンゴル語 eme (女) に対応する OJ はオモ (万葉2925 於毛, 4401 意母) 「母。乳母」であって、^{注4} 女ではない。

2. 臥 köyu: kebte- (元朝秘史には gebte- もある) モンゴル語 e は OJ ö (=O₂) に対応すると見るのはよいが、その他の部分 (-yu: -bte) の対応は見出せない。両者の一致の「判定」は下せない。

3. 名 na: nere モンゴル祖語の「名」は *nere と見られる。他のアルタイ系言語に対応形が見られない。日本語の「名」は *nāN にさかのぼる。^{注4} 両者の「一致の判定」は下せない。

4. 目 me: nidün

「目」は OJ メ乙類でマと交替する (cf. マ・ナ・コ)。メは *ma 又は *mai にさかのぼると見られている。ポツペはエヴェンキ語 nundun 「目」, 朝鮮語 nun 「目」を考慮して *nündün というアルタイ祖形を立てる。^{注5} ツィンツィウスはエヴェンキ語の語形をモンゴル語の古い形 *nündün からの借用と見る。^{注5} いずれにせよ、モンゴル語 nidün < *nündün が mez (目) と「一致」するとの判定は下しえない。

5. 黒 kurosi: qara

この比較が困難をふくむことはラムステットが1924年の「アルタイ諸語と日本語との比較」^{注6}の中で正当に指摘しているとおりに。

6. 其 (彼) kare: tere

問題にならない対比である。

7. 唾 tufa: cifele- (唾をはく)

この満州語は *cifen 「唾」に -le- がついてできた動詞である。これは次のツングース語と関係がある。エヴェンキ語 tumin~tomin, ソロン語 tomi 「唾」, ラムート語 tumni- 「唾をはく」, ネギダル語 tomon 「唾」, オロチェ語 tupin-a- 「唾をはく」, ナーナイ語 topi

(4) ある国語学者の語源探究

^{注7}「唾」.^{注8} オルチャ語 tifunči~tipi「唾」, tifu-「唾をはく」. オルチャ語以外は *tupin~*topin のような祖形に由来し, オルチャはそのメタテーゼ *tipun に由来する. オルチャの異形 tipi から推定されるように, 満州語の *cifen <*tipen も *tipun からの変化であろう. OJ の tufa<*tupa はこの *tipun とともに上記の *tupin とともに一致するとは言えない.

8 は5と同じ.

9. 腕 kafna (ude): udluq

トルコ語と比較されるのは括弧内の^{ウデ} ude (腕) であろう (『大言海』は折手^{ヲテ}に由来すると説く). 江博士はこのトルコ語を小野川秀美の「突厥碑文・訳註」とブロッケルマンの中世チュルク語辞典等を活用して示したとしているが, ブロッケルマン辞典^{注9}には uđluq「腕骨の厚い個所」dicke Stelle am Armknochen とあり, 「前膊骨の広い部分」^{注10}のことであるが, 大野氏は, その ud (正しくは uđ) の部分がウデに似ているので「一致を判定」したのでであろう. しかしオルホン碑文 (キュル・テギン碑文) に出る udluq は「(雄馬の) 腰 (大腿)」^{注11}のこと.

フォン・ガバインの『古代トルコ語文法』も udl(u)q に「腰骨」(Hüftknochen) の意味を与える.

セヴォルチャンの『トルコ語語源辞典』^{注12}によれば ujluc~uđluq~ustux~udluq~ul:uq~uwluq~üjlük~utuq~otuq の諸形があり, ①腰 (大腿) ②腰部 ④大腿の内部. もものつけね ④せんこつ. 動物の腰, 尻 ⑤脛骨 ⑥ひざ ⑦前膊骨の広い部分などを意味する. *ub-~*uv-~*uđ(*us)-.....「羞恥」に接辞 -lig (一定の個所に, あるものが集中していることを表わす) がついてできたことばと見られる. セヴォルチャンは「恥部」が原義だろうと見る.

このように見ると, ウデ (腕) とトルコ語 udluq とが「一致する」と判定するのは根拠がないことがわかる.

「アルタイ語の専門家」(注1参照) 江博士のアルタイ諸語と日本語との比較はほとんどどれをとってみても, アルタイ学的立場からの検討に耐えない. シンポジウム当日会場で売り出された大野晋編『日本語の系統』(「現代のエスプリ」別冊. 日付は6月15日となっている. p. 193) では江氏は満州語 usiha「星」を日本語 Fosi と「相関関係の考えられる」語と見ているが, これはツングース祖語 *p- の発達の無理解にもとづく誤った比較である. オルチャ語 xosita, ナーナイ語 xosikta~osikta「星」は満州語とともに *posi の再構を許さず, 「星」を表わす日本語・満州語が「相関関係」にあるとは考えられない. またトルコ語の jimis̄, jāmīs̄「果実」が OJ mi (実) と「やや相関性の考えられる」語 (p. 160, 193) とするが, このトルコ語は jī-~jā- < *jē-^{イェ}「食べる」に -mis̄ という接辞^{ミシ}がついてできたことばであって, 日本語の mi (実) とはまったく無関係である.

次に江氏の注1の論文, p. 29によれば大野博士は次の「バプア湾沿岸諸語」と「上代日本語」との「一致の判定」を下したという.

	上代日本語	バプア湾沿岸諸語
黒	kurosi	kirikiri
雲	kumo	koa, kwova

死	sinu	sinugudabo
吞	nömu	nobo, bo'a
食	kufu	ko
羽	fane	pine
臥	köyu	keyaiye
居	wiru	berai, pira
皮(膚)	kafa	kapo, kape
小	tifisasi	titititi (複数)
星	fosi	ho, pide
太陽	fi	himio
尾	wo	wapo
齒	fa	pi, pese
歩	ayumu	arao
水	midu	mu, mu, ma
女	me	mamie, mau,ama

この程度の類似に「一致の判定」を下す人は比較言語学について何を考えているのであろうか。私たちは驚くばかりである。

これらのパプア語資料は Karl Franklin が編集した『太平洋言語学』双書 C, No. 26 (キャンベラのオーストラリア国立大学言語学科, 1973年. 第2版は1975年) の The linguistic situation in the Gulf district and adjacent areas, Papua New Guinea の付録 (p. 541—592) からとったものである。そこにあるスワデシュの100項目リストに対応する約70の言語のリストの中から、いくらかでも日本語と似ていそうなものを取り出したので、上記の語形はきわめて狭い分布を示し (つまり, 70近くの言語のひとつにしか見られないものが大部分), 日本語との類似と言っても偶然的な性質を帯びている。同双書編集部は私にこの付録の出版を許可したので、ひろくわが国の研究者が江・大野氏の比較の方法を検討できるように、近く出版予定の拙著の中でこれを発表する予定である。

さいきん大野博士はインドのドラヴィダ語族のタミル語と日本語の比較を試みており、前記シンポジウムでもタミル語が日本語と系統関係があるかのような説を主張した。氏の比較方法を検討する前に、**ドラヴィダ祖語の古さ**について一言しておきたい。ドラヴィダ諸語の研究の第一人者であるモスクワの M. S. アンドロノフ^{注13}は、言語年代学的研究の資料によって、ドラヴィダ祖語の分裂は紀元前3千年代と4千年代の境目に、つまり今から5千年前にはじまった、とする。これを正しいとしよう。仮に大野氏らが考えるように、日本語がドラヴィダ系であるとすれば、ドラヴィダ・日本共通祖語の崩壊の時代はそれより数千年古であろう。日本祖語とドラヴィダ祖語に分かれたのは、少なくとも今から7～8千年前のことではなからうか。この年代は琉球祖語と狭い意味の日本祖語との分離後の経過年代の何倍かになるであろう。大野博士の日本・タミル比較を検討するさいに、このことを忘れてはならない。

大野氏によると (「言語」4-115, 4号, 115ページのこ) 日本語アヤカシ ayakasi (妖

(6) ある国語学者の語源探究

怪)はタミル ^{アーヤッカットゥ} **ayakkattu** deceitful fabrication, false statement (ごまかしのデッチあげ 虚偽の陳述)に対応する, という。7~8千年前にわかれた二つの言語の語形にしては、あまりに似ているので、私たちは驚くよりも疑いが先立つ。参考までにアヤカシについての IKJ の説明を見よう。

①海の妖怪。海上で死んだ者の魂が仲間をとるために現われるという。舟幽霊「なうなうこの舟には——が憑いて候」(謡・舟舟慶) ②<転じて一般に>あやしいもの、妖怪・変化。「いづれも——のつきたる勝頼公〔ノ〕御備へなり」<甲陽軍鑑+九>。「物の——, かやうの事ぞと, 皆人に安堵させて」<西鶴・武家義理—> ③愚か者。馬鹿。「これを——かなと孔子の仰せられたらば」<論語抄述而>

この説明によるとアヤカシの原義は舟幽霊で、妖怪というのは転義である。これをタミルのアーヤッカットゥと比較しようとするが、タミル語は ^{アーヤ} āya (収入・歳入)+kattu「結び。ひも。虚偽」からなる合成語である。日本語アヤカシもアヤとカシに分析可能で、アヤ、カシがタミール āya, kattu と関連していることを証明しなければ、シロウトの語源遊びとどこもちがうまい。その証明は大野博士に可能だろうか。次の例もこれと同類。

「言語」3-65にはマヤカシ(術, たぶらかす物)はタミル語 ^{マヤフカチ} **mayakkaṭi** bewilderment, intoxication に対応するとある。この英語は「当惑・酔うこと, 興奮」の意味。「週刊朝日」(2月15日号, p.19)では ^{マヤカシ} mayakasi (偽り)をタミル語 ^{マヤフク} mayakku (たぶらかす)と比較する。マヤカシのような近世語を比較に出すのも感心しないが、タミル語の語構成に注意しないのは一層感心しない。mayakku は ^{マヤ} maya-「誤る」と関係のある ^{マヤンク} mayanku-「混乱する。当惑する」(自動詞)の他動詞形である。このようにして成立した mayakku と ^{アティ} aṭi「たたく。一撃」との合成したものが ^{マヤフク} mayakkaṭi である。語構成に注意しないで、^{マヤフク} mayakku, ^{マヤフカチ} mayakkaṭi をマヤカシと比較することをかりに言語学者が行ったならば、どんなことになるのだろうか。

次の諸例もこれと同類である。

「言語」4-116では ^{アルク} aruku (歩く)とタミル語 ^{アルクク} alukku to shake (tr.) slightly; strut, swagger (少しふりまわす。気どって歩く。いばって歩く)を比較する。alukku というのは ^{アルンク} alunku- to shake slightly (自動詞)の他動詞形であって、原義は「(肩を)少し振る」である。「気どって歩く。いばって歩く」は転義である。語の由来も、原義も究明していない。

「言語」2-62では日本語 ^{タル} taru (垂)とタミル ^{タル} tāṛ to fall low, be lowered, be low (as a roof),……を比較する。タミル語はドラヴィダ祖形 *tā-t- にさかのぼると見られるから ^{注14} ^垂 ルとは簡単に比較できない。

「言語」2-61では日本語 tatu (禁断): タミル ^{タトゥ} taṭu to hinder, stop, obstruct, forbid, prohibit, を比較する。タミル語は *taṭ- < *taṭ- t- (*taṭ- / taṭ-) にさかのぼるとされるから ^{注15}、この比較も簡単にはできない。

「言語」3-63では日本語 Faru (貼る, ……): タミル ^{パル} parṛu to grasp, seize, ……adhere to, touch……を比較する。ドラヴィダ祖形は *paṭ- (祖語において *paṭ- と交替した可能性あり)と見られ、この比較も問題である。

「言語」4-115では日本語 ^{アラ}ara (骨アラ・類聚名義抄) をタミール **ār** sharpness, pointedness (参考 Malayalam 方言 **ār** chip, splinter (as of bamboo)) と比較する。南ドラヴィダ祖形は *ār であるが、ドラヴィダ祖形は *cār^{注17} である。この比較も困難。

「言語」2-61では日本語 saru (去る) とタミル **cāru** to slip off, slip down as from a tree, slant, incline as a post, deviate, flow, issue とを比較する。ドラヴィダ祖形は *cār-。この比較も困難。

「言語」2-61では日本 tatu (発ツ) とタミル語 **tattu** to leap, jump, skip, go by leaps and jumps……「とびはねる。とびはねて行く」を比較する。意味上の大きなちがいがある上にこれはサンスクリット起源と見られる。

「週刊朝日」(2月15日, p. 19) では日本語 ^{サフベリ}sappari 「味がさっぱりしている」をタミル **cappai** 「味がうすい」と比較する。このタミル語はサンスクリット carpaṭa 「平らな, 平坦な」と関係があると見られている。

この種の比較はいくら多く提出しても、学問的にどうということはない。

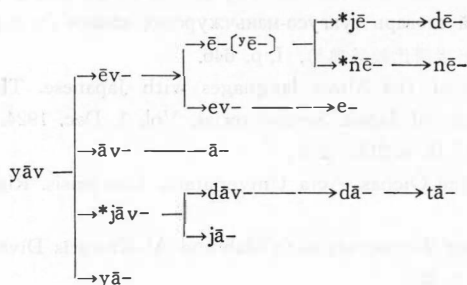
ところが次の疑問代名詞の比較は少し私たちの注意をひく。

「言語」(1-83) に曰く。

「タミール語には e, ē を語源とする疑問詞は極めて多く、ここに挙げきれない。e-i の対応〔タミル e : 日本 i の対応。引用者〕を考慮に入れることによって、日本語のイク(幾)イカ(如何)イツク(何処)イツチ(何方)などのイの部分、これらの言葉の疑問の意味を表わすものであったことが理解される。イク(幾)のクは、長ク赤クなどと同じ副詞接尾語であり、イカ(如何)のカは豊カ、ノドカなどの状態を示す名詞的接尾語である。イツク(何処)はイ(何)ツ(の, 格助詞)ク(所)という合成語の転であろうし、イツチ(何方)イツへ(何方)なども同様にして理解することができる。」

タミル語の疑問詞の語根を考慮に入れなければ幾, 如何, 何処, 何方のイが疑問の意を表わすことが理解されないのだろうか。そんなことはない。これらのことばの分析だけでも、イの部分か疑問詞の語根を形成していることは十分にわかる。それを明らかにした上でタミルの疑問詞の語根 e, ē との比較をとりあげ得るのではないか。ところでタミルの e, ē を日本語の疑問詞の語根イと比較する前に、まずタミルの e, ē がどのような祖形にさかのぼるかをしらべて見る必要があるのではないか。

アンドローノフはタミル語をふくめたドラヴィダ諸語の疑問代名詞を比較検討した上で、



(8) ある国語学者の語源探究

それらの史的発展を上のように画いている。

この表はタミル e : 日本 i の対応によって、タミルの疑問詞の語根 e, ē を日本語の疑問詞の語根イと同源視しようとする大野博士の試みが短絡的であることを示す。

大野博士の議論のすすめ方にはどうしても理解できないようなところがある。例えば、カラ・ウス (万葉には辛雫とある。3886) のカラをタミル語 kal「石」から「石」と解していることである (「言語」2-57)。ふつうはカラは韓又は唐と解され、「外国伝来の意」とされる (柄という説もある)。先ず日本語の資料からカラ「石」の存在の証明をしないで、タミル語に kal「石」があるから、カラウスのカラは「石」にちがいない、という議論のすすめ方には、私のみならず、ひろく国語学者もついて行けないと思う。

大野博士はタミル・日本語比較例を400近く提出しているが、その中には数詞の比較はひとつもない。代名詞の比較では疑問代名詞を取扱ったが、これは上に見たように失敗であった。大野氏の考えるようにドラヴィダ語族と日本語が系統関係をもつなら、数詞や代名詞によい比較例がありそうなものであるが、それがあげられないことは、400近い比較例の正しさにたいする疑いを強める。

大野晋博士の語源研究は本質上、非歴史的な類似語並列主義にとどまる。私は、中でも特徴的な比較例二つ、**皇**と**銜**をとって**皇銜語源説**と呼びたいと思う。

私たちは大野博士が**皇銜語源説**の立場を一日も早く克服することを希望してやまない。

注1 江実「日本語の源流を求めて」,「日本文化」誌,1979年9月発行。

江氏について大野晋氏は「江実は、元来、アルタイ語の専門家として、「蒙古源流」の逐語訳によって学士院賞を受賞している」(大野晋編集『日本語の系統』1980年, p.136)と紹介しているが、このような事実はない。大野氏がもう少し注意深くあるよう希望したい。

注2 G. J. Ramstedt. Studies in Korean etymology, II, Helsinki 1953, p. 10.

注3 В. И. Цинциус. К этимологии алтайских терминов родства. АН СССР. Очерки сравнительной лексикологии алтайских языков. ツィンツィウス, アルタイ諸語の親族呼称の語源について, ソ連科学アカデミー編『アルタイ諸語比較語彙学概説』, レニングラード1972年, p. 25.

注4 琉球諸方言の nā, 波照間方言の naŋ から琉球祖形 *nāN を立てる。OJ, 日本諸方言の出発形もそれと同じと見られる。

注5 N. Poppe. Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen. Wiesbaden 1960, p. 39. АН СССР. Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков (ソ連科学アカデミー編『ツングース・満州諸語比較辞典』), I, p. 646.

注6 G. J. Ramstedt. A comparison of the Altaic languages with Japanese. The Transactions of the Asiatic Society of Japan. Second series, Vol. 1, Dec. 1924.

注7 『ツングース・満州諸語比較辞典』II, p. 213による。

注8 P. Schmidt. The language of the Olchas. Acta Universitatis Latviensis. Riga 1923, p. 283.

注9 C. Brockelmann. Mitteltürkischer Wortschatz nach Maḥmūd Al-Kāšraris Divān Lurāt At-Turk. Budapest 1928, p. 228.

- 注10 AN СССР. Древнетюркский словарь (ソ連科学アカデミー『古代トルコ語辞典』, レニングラード1969年), p. 606
- 注11 (10)の辞典, p. 605は бедро (腰, 大腿)と訳す。ただし(?)を付しているから、やや疑問があるようだ。尤もこのことばをふくむキュル・テギン碑文からの引用では「(雄馬)の腰(大腿)」とし、(?)をつけていない。
- 注12 Э. В. Севортян. Этимологический словарь тюркских языков (セヴォルチャン, トルコ諸語語源辞典) I, モスクワ1974, p. 578 ff.
- 注13 М. С. Андронов (1931—). Дравидийские языки (アンドロノフ, ドラヴィダ諸語), ソ連科学アカデミー『アジア・アフリカ言語』双書第2巻, モスクワ1978年所収, p. 323.
- 注14 Bh. Krishnamurti. Telegu Verbal Bases, Berkeley 1961, p. 381.
- 注15 同上, p. 375.
- 注16 同上, p. 423.
- 注17 同上, p. 290.
- 注18 М. С. Андронов. Сравнительная грамматика дравидийских языков (アンドロノフ, ドラヴィダ諸語比較文法), モスクワ1978, p. 277.

(昭和55年6月30日受理)

—京都産業大学国際言語科学研究所教授—